果樹試験場　農業革新支援スタッフ

果樹の結実安定に向けて

開花期のスモモ「貴陽（棚栽培）」

スモモやオウトウ等の果樹では、結実安定させるために人工受粉が必要です。果樹試験場では、成果情報（平成２３、２７年度）として受粉する時間帯の違いがスモモ、オウトウの結実に及ぼす影響とスモモ「ソルダム」「サマーエンジェル」「貴陽」の受粉可能な開花後日数について成果を発表しています。

その結果、スモモでは、受粉する時間帯による結実率の差は小さく、オウトウでは１０～１４時を中心とした受粉で結実率が高い事が分かりました。受粉可能な日数は「ソルダム」で開花９日後まで、「サマーエンジェル」で開花７日後まで受粉能力がありました。また「貴陽」では、開花３～４日後の結実率が最も高く、開花９日後まではある程度の受精能力がある事が分かりました。開花期間中は、天候により思うような受粉作業が出来ない場合もありますが、全ての花が一斉には開花しませんので、結実率の高い時期での人工受粉を行って下さい

なお、開花期間中は凍霜害の被害を受ける恐れがあり、被害を受けると収量、品質に大きな影響を及ぼすため、開花期に強い寒気が予想される際にはつぎの対策を徹底して下さい。

凍霜害防止対策

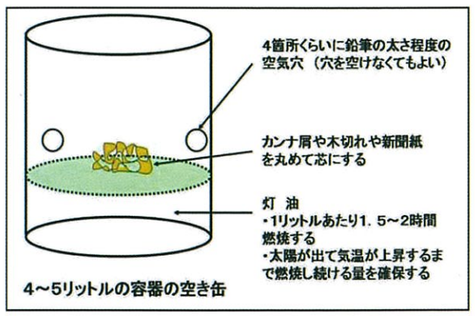
燃焼法

- 凍霜害発生の危険温度になる場合に限り燃焼法（霜コン）を用いる。
- 燃料は、煙の少ない灯油を使用する。設置数の目安は、１０ａ当たり３０カ所程度。
- 気温が１℃前後になったら燃焼を始め、気温が上昇した時点で消火する。

※古タイヤ、廃油、チップ等のバイ煙が多量に発生する資材の燃焼は、法律や条例（山梨県公害防止条例）で禁止されています。

栽培管理

- 被害が心配される地域では、摘蕾・摘花を軽くし、開花中は人工受粉を徹底し結実安定を図る。
- オウトウの雨除け栽培では、凍霜害の恐れがある場合にはビニールを広げる。
- ブドウのホース栽培は、基部の２芽は被覆せず、凍霜害発生の恐れがある場合には、ホースは除去する。



なお、県では、災害に強い果樹生産に向け「果樹の気象災害対策マニュアル」を作成していますので、凍霜害対策も含め気象状況に応じた栽培管理に活用して下さい。

「果樹の気象災害対策マニュアル」
農業技術課HP
http://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/index.html

平成29年度凍霜害警戒期間について

- 凍霜害警戒期間は平成２９年３月12日から５月20日までの70日間。
- 農業気象情報の伝達は、報道機関の天気予報等を通じてお伝えします。（ＮＨＫテレビ・ラジオ、ＹＢＳテレビ・ラジオ、ＵＴＹテレビなど）
- 技術対策は「農作物の気象災害に対する技術対策資料」もご覧下さい。

山梨県普及センターだより

Yamanashi Agricultural Extension Service Information

編集／発行　山梨県総合農業技術センター　住所　甲斐市下今井1100 〒400-0105
Tel.０５５１－２８－２４９６　Fax.０５５１－２８－４９０９
URL.http://www.pref.yamanashi.jp/sounou-gjt/
E-mail.sounou-gjt@pref.yamanashi.lg.jp

No.36
平成29年3月21日発行

農業革新支援スタッフ

評価が高い！ピラミッドアジサイ県育成新品種「２４－１」

山梨県花き園芸組合連合会「ピラミッドアジサイ研究会」では、切り花や鉢物等のバラエティー豊かなピラミットアジサイの産地化を目指して取り組んでいます。県が育成した新品種の「２４－１」を、同研究会が豊明地方卸売市場で開催される日本最大級の花き市場商談会へ出展することになり、総合農業技術センターでは、この取り組みに対し、ポップの作成や展示方法等に支援を行いました。商談会では、「２４－１」を中心に様々な商品を紹介するとともに、市場や専門店等の担当者に対しニーズ調査を行い、その結果、「２４－１」は早期に花色変化し、鮮明な赤紫色に変わることから、訪れた多くの方々から高い評価が得られ、出荷を待ち望む声が聞かれました。

今後は、「２４－１」の親株を導入した９戸の研究会員を中心に、品種の定着に向けた支援を行っていきます。

鮮明な赤紫色の「24-1」（9月）

豊明市場商談会への出展（9月）
右側中間のアジサイが「24-1」

新規就農者の技術向上と経営の早期安定支援

本県の新規就農者数は、平成２７年度が１２５名、法人への雇用就農者を含めると２９０名と年々増加傾向にあります。

県では、自営就農して間もない新規就農者の技術向上と経営の早期安定を図るとともに、新規就農者同士の情報交換の場を提供するため、新規就農者集合研修を継続的に開催しています。

研修は、果樹と野菜でそれぞれビギナーコース（就農して間もない認定新規就農者等）とステップアップコース（前年度ビギナーコース受講者が対象）の２つのコースに加え、農業経営を行っていく上で必要な知識や、各種制度等について研修を行う共通課題研修を開催しました。受講生４７名に２４回の研修を実施し、平均約７割の受講生が出席し、受講生の意欲の高さがうかがわれました。

この研修を通して、新規就農者の円滑な経営開始と早期の技術習得が行われるとともに、新規就農者同士のつながりをつくるきっかけになることを期待しています。また、来年度も４月には募集を行い、対象者を変えながら取り組みます。

共通課題研修の様子

専門技術研修の様子

中北地域普及センター　女性農業者によるワークショップを開催しました

山梨総合研究所研究員を招きワークショップを開催

当普及センターでは、女性農業者ならではの視点を活かし、農業・農村の活性化を図ることを目的に、女性農業者を対象とした意見交換会を昨年１２月と今年２月に開催しました。

ワークショップには、新規就農者からベテランまで幅広い世代の女性農業者が参加し、農産物・加工品の販路拡大や食育活動、女性農業者のネットワーク作り等に関して活発な意見交換が行われました。

これらの意見をもとに、地域農業の活性化に向けた新たな活動の展開につながるよう今後とも支援を行っていく予定です。

▲活発な意見交換が行われました

◀ワークショップでは、参加者からも検討結果の発表がありました

峡東地域普及センター　儲かる農業を目指し経営能力の向上を！

峡東地域普及センターでは、山梨県農業会議、ＪＡ等と協力して「経営改善研修会」を開催しています。この研修会は、複式簿記を学ぶとともに農業簿記ソフトを活用して決算書を作成し、自らの農業経営を客観的な数字で把握することで、経営改善に活かすことを目的としています。

本年度は、複式簿記の基本から学ぶ入門コースと、既に記帳を実践している農家を含めた質問相談会を行いました。受講者のほとんどが損益計算書、貸借対照表を作成することができ、自分の経営状況を把握するとともに、経営計画の立て方等経営改善に関して理解を深めることができました。

農家が自らの経営状況を把握し、経営改善につながるよう今後も農業簿記を中心とした研修会を開催し、農業経営者の育成支援を行っていきます。

入門コース開講式

農業簿記ソフトを使った演習

峡南地域普及センター　農村の魅力を体感する日帰りツアーの開催に向けた支援

県内外の方に地域の農業と農村の魅力を知っていただきたいと、市川三郷町の農村女性が自ら企画・運営した、農作業体験や農家との交流を行うツアーが、平成28年の９月と12月に開催されました。

９月は「絶品！大塚のとろける秋なす収穫体験となすのフルコースランチツアー」、12月は「話題の大塚にんじん収穫体験と大塚にんじんフルコースランチツアー」と題して、市川三郷町大塚地区で栽培されている、柔らかさが特徴のなすと、長さと濃厚な味が特徴の大塚にんじんの収穫体験を中心に実施されました。

また、ツアーでは、収穫体験と併せて、地元の桑の葉茶の工場見学や地元ワイナリー見学、紙漉き体験や歌舞伎資料館の見学など、地域の文化や産業にも触れてもらい、地域の魅力発信に工夫を凝らした内容となりました。

大塚なす収穫体験の様子

大塚なすの調理法を紹介

農村女性手作り大塚にんじん弁当

両ツアーとも多くの方々が参加し、「とても面白く興味深かった。」「楽しく貴重な体験ができた。」と、大変好評でした。

さらに、「もっと開催して欲しい。」「他の農作物も収穫してみたい。」という要望があったことから、29年度は、やはり地元を代表する特産品である「甘々娘」（スイートコーン）も計画に取り入れて実施することになりました。

普及センターではこの取組について、市川三郷町と連携し、体験プログラムの企画や運営、参加者の募集等に支援を行いました。今後も、体験メニューづくりや加工品開発など、交流人口の増加に向け、地域の魅力を発信する女性グループ等の活動に対し、積極的に支援していきます。

富士・東部地域普及センター　農業技術基礎講座を開催しました

富士・東部地域の農業形態は自給的農業が中心であり、退職後の就農が多いという特徴があります。また、市場出荷を行う主産地ではないため、就農希望者が就農前後に栽培の基礎知識を学ぶ場や、効率的な栽培方法を目にする機会が少ない環境となっています。

税務申告と帳簿作成について学ぶ

年3作栽培の畝づくり研修

そこで、富士・東部地域普及センターでは、就農希望者や就農して日が浅い人を対象に、誰にでも分かりやすい栽培知識を得られる場として、農業技術基礎講座を開催しました。この講座は座学を基本とし、土づくりや鳥獣害など毎回異なるテーマで１０回実施しましたが、その中に総合農業技術センター岳麓試験地での年３作栽培等の現地研修も組み込みました。

年内施肥マルチを学ぶ

受講者からは、栽培上の問題についての質問も多く寄せられるなど、栽培意欲向上が伺えました。また、研修が終わった後も電話での質問があり、訪問による技術指導等を行い、技術向上を図りました。受講者の中には直売所出荷を目指す人が多く、資材その他について受講者同士の情報交換も盛んに行われ、栽培や出荷に通じる仲間づくりへの一歩が踏み出せたようです。

今後は、受講生が栽培を積み重ね、技術の研鑽が行われるよう、支援していきます。